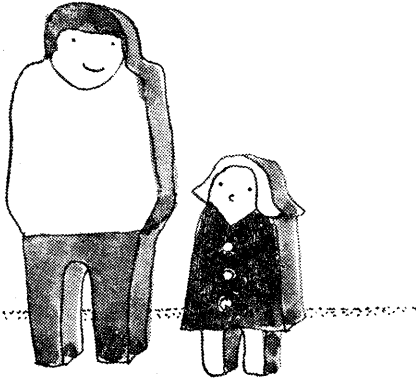


はるにれの会

若いおおかあさんたちへ

## 美谷島いく子



はじめに自己紹介させていただきます。私は、五十四年に結婚し、故郷、松本に帰りました。翌年四月に長女が生まれ、彼女が一歳半の時から一年間、理論物理学者である夫の留学の為、西ドイツの大学街マールブルクで過ごしました。五十九年十月に次女を出産しました。それまでは、長女を祖父母に預け、隔週に一度、上京して、児童文学を教えていましたが、今は、育児に専念しています。

住居は、松本「あがた県の森公園」の一隅です。市街地の中心ですが、北アルプスや美ヶ原が見渡せ、旧制松高跡の

広大な敷地の中なので、子どもと過すには良い所です。

北杜夫らが住んでいた思青寮は、昨年取り壊されましたが、松高縁の古い木造の校舎や講堂が残され、樺やヒマラヤ杉の並木道を歩いていると、高下駄の音が聞こえてきそうです。夏には蟬や蝶を追っかけたり、一本の桑すみの木に群がる子どもの姿が見られます。秋には、娘の大好きな実の生る木が幾本かあるので、散歩が楽しみです。良い香のする木瓜や枳殻の実。水に濡らして研ぐと宝石のように光るので、娘が宝石と呼んでいる櫛の実。橙色の実が数珠成りに生る銀杏、アドベントクランツを作る大きな松毬等々。先日は一隅で縄文式住居の発掘をしており、炉や柱の跡、土器を見せて貰い、娘は驚いていました。

核家族の中で、こうして娘と共に過してきた数年間のことで、是非書き留めておきたいことが幾つかあり筆を執っています。

## 「私の妊娠 出産」

### (1)長女の出産

私は、結婚の年の初夏に、身籠りました。夫の帰宅が遅いので、お産が近づいたら、実家に帰ることに決めました。五十四年九月二十日に、実家の近くの国立病院で初診を受け、その場で出産の申込みをしました。大病院なので朝早く出掛けても半日以上かかりましたが、赤ちゃんの心音を聞いたり、帰りに実家に寄り、母や祖母からお産の体験談を聞いたりで、病院通いも楽しみでした。妊娠八ヶ月までは、東京での仕事も続けられる程、母子共に健康でした。このままゆけば、妊娠出産は、心配することはないと、不遜にも思っていました。

ところが、忘れもしない四月十日、大学の入学式の日

に事件が起ったのです。朝五時に、夫が強い腹痛を訴え、のたうち回りました。夫は以前から胃の具合が悪いと言っていましたので、「胃潰瘍か胃癌ではないか？」という不安が、私の頭を過ぎりました。運よく、隣りが大学の整形外科と外科の医師宅でした。私は迷わず、外科のW家のドアを叩きました。後で考えると、整形外科

科のN家の戸を叩いていたら、事態は変わっていたのです  
が……W医師は、夫を診察し、腹部が張っているので内  
臓破裂の疑いがあると、すぐ大学病院の外科に入院の手  
続きを取って下さいました。救急車で病院に着くと、同  
僚の方々が駆けつけ、手術の際の輸血液の手配をして下  
さいました。早朝にもかかわらず、H教授が診察して下  
さいました。

私はその間「生まれてくる子どもは、父親の顔も知ら  
ないことになるのだろうか。何故もっと早く、病院に検  
査に行かせなかったのだろう。とにかく今は、私がしっ  
かりしなくては……」等という思いが入り乱れ、「未亡  
人になるのは、まだ早いよな」なんていう慰めの言葉  
も、妙に耳につきました。診察結果を待つ間、暑くて喉  
が渇き、洗面所で水を飲みました。

結果は十時頃わかり、胃ではなく、椎間板ヘルニアと  
いうことで、整形外科に入院しました。原因は山種など  
の美術館巡りをした疲れが、腰にきたらしいのです。

夫の命には別状ないというものの、入院は一ヶ月は必

要ということでした。義母が家に泊って下さり、夫の付  
き添いをして下さいました。出産予定日を十三日後に控  
えた私は、夫と私が離れた病院に入院しては不都合  
が多いので、急遽産院を、夫の入院した大学病院に変更  
せざるを得ませんでした。

私は翌日大学病院を訪れましたが、大変な浮腫みがき  
ていました。四月十八日の診察の時、貧血と中毒性がひ  
どいので、陣痛が来なくても早急に入院したほうがよい  
と言われました。構内の桜が満開でした。

私は、二十日の朝入院しました。部屋は暗く、重症の  
中毒性妊婦三人の相部屋でした。その夜軽い陣痛がきた  
ので、二十一日の朝方、陣痛室に移りました。そこでは  
面会時間には、義母や母に腰をさすって貰い、励まされ  
ました。強い陣痛がくるのを待ち、二十一日の夜中、一  
人で分娩室に入りました。

しかし、難産でなかなか生まれず、分娩台の上で一日  
が過ぎ、私は、すっかり疲れ切っていました。腰に  
掛けていたタオルケットの上から腹式呼吸の時、強くさ

すっていたので、タオルケットがぼろぼろに破けていました。前期破水で胎児も危ない程でしたが、三人の医師のお世話になり、点滴に酸素マスクをして、自然分娩で頑張りました。

予定日きっかりの四月二十三日午前三時十四分、長女を出産できました。三五八〇gの大きな子で、仮死状態で生まれましたが、助産婦さんが「泣きなさい」と言ったら、元気な初声をあげてくれました。私は、多量出血で疲れ切っていました。母となった喜びに興奮して眠られず、一人、分娩台の上で休んでいると、嬉しくて涙が止まりませんでした。

けれども、それからが予想以上に大変でした。検温があり、どうにかベッドの上で起きあがったのですが、目眩がして、ベッドから落ち、気を失ってしまいました。

体温計の水銀が床に飛び散りました。

病室に戻りはしたものの、膀胱麻痺と原因不明の高熱が続き、点滴と輸血を続けました。疲れがひどく、授乳時間に娘を抱くことすらできませんでした。娘はとても

元気でしたが、私は高熱が下らず、病気への不安と恐れ、そして、早く娘を自分の手でみてやりたいという焦りの毎日でした。高熱で悪夢の中、新生児室から泣き声が聞えると、グリム童話の「産まれたばかりの赤ん坊を取り替えられる話」が頭を過ぎったりして悶々としていました。

毎日、別棟の病室から見舞ってくれる夫や母に励まされ、授乳できるようになり、入院後十七日目の五月六日退院しました。車で実家に向う途中、五月の光に映える若葉がとても眩しく思えました。二十日間実家で休み、その後は順調で、六ヶ月目からは東京の仕事も始めました。

長女誕生の時には、このように親子三人が同じ病院に入院という、漫画のようなことになってしまいました。

私が難産で産後の肥立ちが悪かった原因は、明確にされませんが、夫の入院という突発事件があり、その精神的不安の影響が大きかったと思われます。こんなことはめったに遭遇することではないと思いますが、これ

からお産をなさる方は、頭の片隅にそういう可能性もあることを思い浮かべておかれれば、万一の場合慌てなくてすむと思います。

私の場合は当時、夫と私の両親が元気で近くにいたので、夫が入院しても産前産後の精神的支えになって貰え、人手が足りないということとはなくてすみました。しかし、それから四年半が経った次女の出産の際、もしそういう事態になっていたら、事情は変わっており、もっと私の動揺は大きかったと思うとぞっとします。核家族化が進み、調和のとれた地域社会でなくなっている今、公的に妊産婦を支えるような人を派遣することができればよいと願わずにはられません。

## (2) 次女の出産

長女誕生の四年後、私は身籠りました。娘は姉となることが嬉しいらしく、誰よりも喜んでくれましたが、不安も大きいらしく期待と不安に揺れ動いているようでした。<sup>(④)</sup>産院はテレビや書物で、胎内から始まって、生後す

ぐにも見られる感動的な母子相互作用について報じられていましたので、母子同室を捜しました。しかし、前のような難産になった場合を考えたり、娘の幼稚園も休ませたくなかったので、結局家から近く、夫のいる大学病院に決め、五十九年三月九日に初診を受けました。貧血と逆子になった他は順調で、八ヶ月目まで東京での仕事も続けました。

ところが、予定日の九月二十八日(実家の秋祭り)が、十日も過ぎても生まれる気配がありません。出産準備をしながら予定日まで待ちつつ過すことは楽しみも大きかったのですが、予定日後一向にいつ生まれるかわからない赤ちゃんを待つことは、不安が先立ち、苦しい思いでした。長女の幼稚園への送迎等、隣人の思い遣りに支えられた時でもありました。

十月十二日に、病院で陣痛促進の注射を受け、子宮口を開いて貰う。

十四日の夜中二時に陣痛がきたので入院。十二時二十三分、三九四〇gの長女そっくりの女児を出産。長

女の時から比べると軽くて済みましたので、念願だった生まれてすぐの赤ちゃんを胸に抱くことができました。裸の赤ちゃんは暖く、右側のお乳を吸わせると驚く程強く吸う。大きく生まれた為か泣き方が少し弱いので、クベース収容し、酸素を吸わせて貰う。長女、夫と一緒に四時頃病院に来る。赤ちゃんは見られず、私の頬に両手で触り泣かずに帰る。

十五日、秋晴れ。母が見舞ってくれる。私は長女が心配になり、面会時間に待っていると、義母より「友達の家へ遊びに行つて帰つたのが遅かったので、今日は病院へは連れてゆけない」と電話があり、がっかりする。長女は入院が夜中だったので、夜、来るつもりだったらしい。私の経過は順調で、授乳も、短時間で上手に吸ってくれるので、母乳だけで足りる。(長女は、混合だった)

十六日、長女、義母と来院。私のベッドの脇で「赤ちゃん、お母さんと一緒にいないの？」ときく。「お乳の時だけ、お母さんが赤ちゃんの所へ行くの」と言

うと、少し安心した様子。長女、初めてガラス戸越しに赤ちゃんを見る。赤ん坊はその時眠っていた。

十九日、少し黄疸の出た次女を残して退院。長女は、「赤ちゃん待っていたのに、何故一緒に帰つて来なかつたのか」と転げ回つて泣いて怒る。いくら理由を説明しても、泣き止まないので困つてしまう。

二十日、病院へ授乳にゆく。ポリープ痛む。

二十一日、次女、退院。長女、初めて身近かに次女を見る。触つて、「ほっぺがふわふわ、あんよがふわふわ」と言う。来客が帰り、長女の就寝時に、次女の授乳が重なつてしまい、長女は、早く私の腕に抱かれたいと怒り泣き叫ぶ。家には、私の入院の日から、義母が泊つて手伝つてくれたが、姉となつて気難しくなっている長女の育児<sup>(㊦)</sup>、赤ちゃんの世話、ポリープの痛みも重なり、くたくたになつてしまう。

それから毎日、ポリープの治療にも通院せねばならず、産後の疲れも出てきて、これなら母子ともに、もう一週間位入院していた方がよかつたと思う。通院の

必要がなくなつてから、十日間、実家で長女と共に休む。

二度、大学病院で出産した訳ですが、長短がありません。長女の時、飽くまでも自然分娩を通して下さったことは、施設やスタッフの整つた大学病院だからできたこと感謝しています。反面、大勢の医師が出入りしている為、産前は医師を決めてその曜日に通院することはできませんが、出産はその日病院にいる医師が担当となります。中には、週一回しか病院に来ない医師もあり、産後異状があつても、緊急でないと他の医師も担当医への遠慮があるので、その日まで待たねばならず、私は次女の時、とても大変でした。

「グリムの国で、娘と暮らして」

帰国後の子どもの教育を考えると、外国で生活したくないという声を耳にしますが、私は、娘と共に西ドイツで生活してとても良かったと思っています。初めは心配もしましたが、娘は、引っ込み思案になりがちな私が、

ドイツの生活に溶け込む導き手となってくれました。ラテルネ、降誕節、復活祭等の季節毎の行事や、グリム兄弟ゆかりの地を訪ねてのグリム紀行、おもちゃ博物館巡りは、娘にとつても、幼年期の瑞々しくしなやかな時間の中に、確実に像を結んだようです。

西ドイツで生活して、日本の子どもを取り巻く環境との違いを幾つか体験しました。今、丁度、次女が長女の滞独中の年齢を迎えようとしており、些細なことですが、考えさせられることが多いので記して終りとします。

日本では何事も一斉にし、教育も画一教育となることが多いが、西ドイツでは個人を尊重している。例えば、幼稚園の入園は四月一斉ではなく、各々が三歳の誕生日を迎えた時個人的にする。幼稚園では子どもの疑問や驚きから「日本」というテーマを決め、文化、風習を伝える催しをし、異文化からの日本人の子どもを、その個性を尊重し受け入れようとしていた。

西ドイツでは、子どもと共に生活する場合、日本より

生活し易い。幼稚園、基礎学校とも、朝早い、午前中だけで終るので、子どもの時間が自由でゆったり流れている。子どもに寄せる細やかな心使いが随所に見られた。

例えば、教会付属の託児所 (Kinderspiele) があり、ボランティアの老婦人が、週二度一歳半以上の子どもを預かって下さり、異国では助かった。

マールブルクは旧市街が城山一带にある為、階段のある石畳の坂道が多い。ここで大学時代を過ごしたグリム兄弟も「険しい小路や沢山の階段は煩わしかった」と述べているが、階段の片側は、滑り台のようになっており、ベビーカーでも通ることが出来る。エリザベート教会縁の福祉の街の心ばせだろうか。

西ドイツは日本より進んだ自動車社会であるが、バスに乗る際、ベビーカーに子どもを座せたまま乗ることができ、子ども連れて買物や旅行をする時、とても有難かった。

グリムを初めとする児童文学が豊かなのは承知の通り

だが、玩具の豊かさや質の良さには驚いた。そしてその歴史を大切にしている。小さな街にも博物館があり、がら、人形、人形の家等が、年代順に保存されている。玩具の産地として有名なニュールンベルク玩具博物館の人形の家は圧巻である。霧が深く日差しも弱い北国ドイツでは、子どもが成長しつつあるその過程が大切に考えられており、人生という果しない旅の初めである子ども時代に、小さい大人としての中途半端な場所ではなく、確固とした場所が与えられている。

注(1)姉となろうとしている長女(K子)の心の変化については、拙稿『姉さんになったK子』舞々7号で少し触れたが、紙面が限られている為、別の機会にもう一度まとめてみたい。

(2)拙稿『マールブルク子ども歳時記』舞々5号、6号で述べた。

(3) R・M・ジェイナ著 川端豊彦訳『グリム兄弟とロマン派の人々』国書刊行会 昭和60年